

神に賞賛される生き方 ～神の目線 敬虔のもたらす財産～ 「深い尊敬と神への愛」

I テモテ 6 : 1 ~ 12

■ 敬虔とは—深い尊敬と神の愛

私たちが神様に眼が向いた時は神様への愛であり、敬虔な行動となると神の愛を持った人と言えます。敬虔とは、神様の愛を持って、信じて愛そうとする行為です。自分の利得への手段ではありません。私たちが求めがちな利得は、自分への評価という場合が多いのではないのでしょうか。神様を知っている私たちは、自分を造られた方に評価される生き方が大切なのであり、造られた人同士で評価しあっても意味がありません。

■ 私たちの敬虔にズレをもたらすもの

《アマレクの存在》アマレクは私たちにとって壁の象徴です。私たちから神様との関係を取ろうとします。それは敬虔がとられ、私たちの心のうちにある愛が失われていくことであり、それがアマレクの目的であることが分かります。神様との関係が崩れると人を見るようになります。そうすると、比較や劣等感の目線になるので、聖書でいわれる神のせよと言われることができなくなり神様との関係に近づけなくなります。敵をみてしまうが故に私たちの心には偽りが出てきてしまうのです。

《痛み》痛みは意識をそこに集中させるものです。痛点がずれていたり、痛みのせいで他の痛みが増幅したり…。あなたが取り込んでいるものがズレているとしたら。私たちは自分の本当のものを伝えることができているということになります。

《高慢》=「違ったことを教え、私たちの主イエス・キリストの健全なことばと敬虔にかなう教えとに同意しない人」とあり、それは「何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病氣」であり、もたらすものは「ねたみ、争い、そしり、悪意の疑り」だと、語られています。(I テモテ 6:3,4)

私たちがみているものは本当に正しいリテラシーなののでしょうか。様々なリテラシーがありますが、私たちは神の目線であるバイブルのリテラシーを持たなければなりません。個人の感情に訴える偽りの情報には力があるため、うその言葉に騙されてはいけません。そして現状の事実を知った私たちは客観的に見なければなりません。その中での真実を見つけ、私たちはどうあるべきか、どう行動するべきなのかで真理が変わっていくのです。自分の本当に伝えるべきことをしっかり表せる人生を選んでいきましょう。

■ 今私たちに何が変えられるか (テモテ 6 章 1 ~ 4 節)

パウロは奴隷制度が正しいわけではなく、その地であってどのように行動するべきかということを残しました。「自分の主人を尊敬すべき人だと考えなさい」という言い回しには意味があります。神様は私たちに、あなたが神の前で心の意志によって自分を変えなさいと言われていて、自分を変えることは自分の考え方を変えるということです。多くの人は問題をみると問題の解決をしようとし、問題を取ろうとしてしまいます。聖書では、奴隷制度を解決するためには、しもべであるその人の行動が大切であると言っているように、問題に対し何が本当に正しいのか神様の前で考えていくことが大切です。パウロは問題の根幹を神様の愛=敬虔の方法で解決をしようとしてきました。

「くびきの下にある奴隷」に対しては、「自分の主人を十分に尊敬すべきだと考えなさい。」と伝えました。また、「信者である主人を持つ人」に対しては、「主人が兄弟だからといって軽く見ず、むしろ、ますますよく仕えなさい。」と伝えました。これらは立場が違うが双方信者に語られているものです。価値観から真理を見出した人には人生を救う力があります。私たちが考え方を変えるだけでこれだけ違うのです。仕えることで、教え・勧める人になって行きましょう。

■ 敬虔の愛をもって社会を信じようとする (テモテ 6 章 5 ~ 10 節)

聖書には敬虔による財産を得なければならないと書かれています。敬虔は私たちが神様の愛をもって社会を信じようとする行為です。私たちはねたみ、争い、そしり、悪意の疑いなどという最悪の方向に行くのではなく、信じて愛そうとする行為をもたなければなりません。世の中には、信じる心や、それまでも利得の手段として考える人になってしまっています。これは、信仰、神を利用して自分がしていることをうまくいかせようとする行為です。多くの場合、クリスチャンが求めてしまう利益は人からの評価です。私たちが求める評価とは造った方からの評価です。私たちは何を一番求めるのかということを考えなければいけません。「満ち足りる心を伴う敬虔こそ、大きな利益を受ける道です」—神様から評価を受けることを学ぶと、人から何を言われても揺らぐことはありません。そして必ず最後には豊かな大きな利益をもたらすことは事実です。

この世での蓄えや名誉は意味がありません。「衣食があればそれで満足すべきです」と言っています。しかし神様はそれだけ満足させるような方ではありません。神様が志を立ててそれをしようとするれば、必要な種をくださいます。あなたは信仰を利用して神様の働きを自分のために用いてないですか。私たちは神の志に仕えているのです。目的は私たちがすることで人々が救われることです。聖書では正しき、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を求めるために召されたのだと言っています。私たちがすることでこれらを求めるためのツールにしていますか。そしてイエスキリストに仕えるのだという思いで十字架に向かっているのでしょうか。

アフガニスタンのキリスト教の墓地に眠っている一人の宣教師は、その地で 30 年宣教をし、種を蒔き続けていましたがひとりも信じる人はいませんでした。その宣教師の強い意志を継いで、弟子が宣教師となり亡くなるまで唯一、一人だけ救いに導きました。その一人、救いに導かれた人が思いを担い種を蒔き続けて数十年、そしてその人によって現在の宣教師がよばれ、そこで多くの若者が神様に出会ったという話があります。100 年近い年月が経過し、初めて実が結ばれた瞬間でした。私たちは諦めなければ、神の志であれば、神が実を結ばれるのだということ、私たちが神への祈りを変え、願いが変わる時に人々への救いとなることを信じ、祈りたいのです。

■ いのり

愛する神様 あなたの御名を賛美します。

私たちは未来を求めながらも今しか見えません。

しかし聖書は未来を語らずに私たちに将来を教えます。あなたは今植えられている環境で喜んでいませんか。太陽のような神様に手を挙げて祈っているのでしょうか。踏みつけられ四つ葉になったクローバーが天に向かって葉を茂らすように太陽の光を遮られることなくまっすぐに受けて子孫を継承するように行えているのでしょうか。あなたが今行っている仕事の目的はあなたがする手の技の故に誰かがそれを受けて喜びの中で神様に会うことです。

もし私たちがキリストの前に生きることができれば、あなたを通して多くの実が残ることを信じます。そしてあなたが願っても得てもない多くのものがあなたに与えられることを信じています。

(要約者:河島 弘子)

(2022年 5月 15日)